

あなたも外交官—
学校教育における国際交
流・異文化理解教育

1. 異文化交流の意義

- 少子化・人手不足→4月から「特定技能」による外国人の受け入れ拡大＝第2の開国
- 多文化共生社会・新たな文化の創造に向けての出発点（職場も地域社会も）
- リスク：ゲッター化・孤立化・搾取（欧米の轍を踏まないように）
- 対策：体制を整え、慎重に受け入れる、異文化を理解し偏見を排する、コミュニケーションをとる（語学の習得）

2. 異文化の受け入れ方

- 日本の常識で判断しない
- 文化の一部を見ただけで全体を判断しない
- 特定個人・グループの行動を一般化しない
- 政府（報道対象）と個人（報道されない）は別
- 人は皆「ホモサピエンス」。しかし文化・国民性の違いがあることも事実。

3. 日本文化（国民性）

- 職人氣質（狭く深く）、磨かれた感性（孤立化・ガラパゴス化の危険）
- 外国文化にも深い関心、中国・韓国・欧米から積極的に学ぶ
- 人との関わりは狭く深い（村社会）。広く浅い人間関係を維持している人は少なく、知らない人に対しては迷惑をかけなければよい、と思っている（島国根性？）
- 和の心 = 臭い物に蓋をする = 曖昧がよい
- 国際化せずともやれると思っている。
- チームワーク・情報共有は得意（e.g. 「はやぶさ」の技術を考古学に（微粒子解析））

4. 欧米文化

(背景) 多民族・多宗教・多文化共存の必要性

- 自立する人間 (キリスト教文化? ・自己責任原則)

例: 静かな駅、悪くなければ謝らない、契約社会、訴訟社会、自己主張と妥協術、

- 気さくで付き合いやすい米国人 (ノータイ文化)、スマイルの効用、前向き姿勢、褒める教育

- 横社会で、心地よい距離（arm's length）を保つ人間関係

例えば：教授と学生、家族の関係（自分の子供を褒める、大学から自立）、「お客様は神様」ではない、挨拶の仕方（近からず遠からず）、民主共和制（首長⇔議会、選挙への積極参加）

- 社交・スピーチの重要性

例えば：騎士道の伝統（レディファースト）、知性と教養とウィットと当たり障りのないジョークを駆使する、立食パーティ・ホームパーティで接客（形よりも中身）、スピーチの役割は初対面から討論まで、酒に頼らない（酔っ払うのははしたない）

5. 学校教育ができること

- 日本に在住する各国の人々の国民性を知り、なぜそのような国民性を持っているかを考えてみる。
- その国と日本との関係の現状を知る。
- 地域に住む外国人から話を聞く。
- 語学教育を通じて文化を学ぶ。（英語文化は

例：仕草、挨拶の仕方、相槌の打ち方、人間関係（縦社会と横社会）

⇒文化の衣を着替えることが出来る人間に